

奄美大島における歴史的文化財を活用した観光開発の可能性

新 田 栄 治

要 旨

観光人類学的分析によれば、奄美観光には島嶼の持つ固有の地理的条件に伴い、単調な観光資源、特定の場所に集中する宿泊施設、島内居住者による島内観光の少なさ、航空輸送への極端な依存、島内観光の単調化、マーケットの限定といった困難な問題がある。従来の観光振興戦略にはない文化財資源学の視点から、歴史的文化財の活用と博物館ネットワーク構想による新たな観光スタイルを提唱する。

キーワード：奄美，島嶼，観光人類学，文化財資源学，博物館ネットワーク

AMAMI OSHIMA'S POTENTIAL OF TOURISM DEVELOPMENT BY MAKING EFFICIENT USE OF ITS HISTORICAL HERITAGES

Eiji NITTA

Abstract

Generally island has some suffocating factors for tourism. However Amami Oshima has many cultural heritages besides natural ones that have attracted tourists. Based on the cultural heritage resource management studies, Amami Oshima has a big potential of island tourism development by making efficient use of its archaeological and historical heritages. For example, two of the cultural resources in Amami should be focused. One is the ancient maritime trade route for commodities such as the trade ceramics and the south sea shells that connected Amami and other islands. Another is the museum network in Amami Oshima. Amami Oshima should aim for the multiple tourism composed of nature, history, culture and experience.

Key words: Amami Oshima, Island tourism, Tourism development, Historical heritage, Cultural heritage

奄美地域の振興計画に置いて観光の持つ経済的効果は大きいこと、観光開発の重要性は国土庁もすでに言及している(国土庁1999)。奄美大島を初めとする薩南諸島の観光について、観光人類学及び文化財資源学、文化財管理学の視点から分析し、奄美大島の観光の抱える問題と可能性について論じる。

1. 島嶼部の観光空間構造からの分析

D. ピアスの観光地理学(ピアス2001)をもとに、島嶼観光としての奄美観光を分析すると、つぎのような結果となる。

(1) 単調な観光資源

たいていの島嶼は観光客を誘致する資源に乏しく、圧倒的に3つの「S」Sun(さんさんと輝く太陽), Sand(白い砂浜), Sea(青く美しい海)に依存する。3Sに、その他のアトラクションが付加されるが、一般的には、これらのアトラクションはそれ自体ではほと

んど需要を創出しない。鹿児島県商工労働部観光課編『奄美観光イメージアップ調査報告書』の奄美に対するイメージ調査においても基本的に同じである。この調査書で列挙された奄美に対するイメージは「青い海」「温暖な気候」「豊かな自然」であり、上記の3Sと共通するといえる。

(2) 特定の場所に集中する宿泊施設

(1)で記したように、観光資源が海と砂浜に集約されるため、宿泊施設は海岸に集中する。そのため観光客は海岸部にある宿泊施設に宿泊せざるを得なくなるため、新たな観光客対象の宿泊施設はさらに海岸部に建設されることになる。その結果、宿泊施設の1地域集中傾向はますます増幅する。2000年現在の奄美大島での宿泊施設は、笠利町東海岸に15、名瀬市海岸部に31、瀬戸内町海岸部に39などとなっており、海岸部での観光資源に乏しい自治体との間に宿泊施設数において極端な差が存在する。例えば、龍郷町には7、住用村では4、大和村では2、宇検村では2である。

(3) 島内居住者による島内観光の少なさ

本土では、本土居住者による本土内観光が相当な需要をもつ。鹿児島県本土居住者による鹿児島県本土内観光が鹿児島県観光での大きな位置を占める。ところが、奄美大島では面積の狭さと人口の少なさのために、島内居住者による島内観光は小さい。圧倒的に島外からの観光客の重要性が大である。そのため、島外からの観光客を対象とする対策が最重要であるが、同じく島内居住者による島内観光の掘り起こしも視野に入れる必要がある。

(4) 航空輸送への極端な依存

奄美群島観光連盟と鹿児島県大島支庁による奄美観光の統計(奄美群島観光連盟・鹿児島県大島支庁2000)に見るとおり、島外からやってくる人々の交通手段は東京発で94.2%、阪神発で87.9%、鹿児島発でさえ78.9%が航空機であり、全体でも76.6%が航空機による(表1)。そのため、空港がある地域が交通路のほぼ唯一の出入口となる。その結果、島への出入り口が単一になり、島内フローが限定的になる。奄美大島の場合にはジェット機の離発着が可能な奄美空港のある笠利町が交通路の出入口としては圧倒的な位置を占めることになる。本土との航路の出入口である名瀬市は、人的交通路の出入口としてよりも物流の出入口としての役割が重要である。

(5) 島内観光の単調化

島に発達する観光タイプが制度化され、ヴァリエティに欠ける。航空機や船のチケット、宿泊先の予約には制度化された旅行システムの世話にならねばならない。スタンダードを満たす宿泊施設の場合、現地宿泊施設は航空会社や旅行会社との提携となる。旅行スタイルが画一化しやすい。たとえば、海水浴、ダイビング、釣り。結果的に、これらの趣味の人しか来ないことになる。このような単調化した観光スタイルは一面では効率的ではある。

(6) マーケットの限定

島である以上、自家用車を利用して、ちょっと出かけるというわけには行かない。そのため安い旅行費用では行けないため、マーケットは限定される。本土居住者にとっては、奄美は遠く、航空運賃が高い。10万円程度で行ける東南アジア地域や、5万円程度で行けるミクロネシアの外国旅行と費用がそれほど違わない。あるいはそれらよりも高くつく。また、奄美のイメージである「青い海」「温暖な気候」「豊かな自然」は、沖縄、グアム、サイパン、プーケット、パンガ等にはかなわない。同程度の金額で可能な海外の海洋リゾート地との競争は奄美にとって厳しいものがある。

2. 従来の観光開発計画

鹿児島県によって平成6年度から3年間、奄美群島の観光振興に関する調査事業が実施された(鹿児島県商工労働部観光課1995~97)。その結論は以下のとおりであるが、問題点も指摘しておく。

表1. 奄美大島入域客・入域観光客数および発地別入域客数・輸送手段
(奄美大島観光連盟・鹿児島県大島支庁2000による)

| 入域客および入域観光客数(推計) | | | |
|------------------|---------|---------|---------|
| 年 | 海路 | 空路 | 入域観光客数 |
| 1996年 | 136,723 | 415,067 | 386,790 |
| 1997年 | 135,507 | 440,714 | 397,340 |
| 1998年 | 132,002 | 443,866 | 404,205 |
| 1999年 | 131,995 | 435,149 | 391,929 |
| 2000年 | 130,022 | 424,823 | 362,165 |

| 発地別 | | | | | | | |
|---------|-------|--------|--------|---------|--------|---------|---------|
| 東京 | | | | 鹿児島 | | | |
| 年 | 海路 | 空路 | 合計 | 年 | 海路 | 空路 | 合計 |
| 1993年 | 2,940 | 1,202 | 4,142 | 1996年 | 91,591 | 297,982 | 389,573 |
| 1994年 | 2,882 | 35,934 | 38,816 | 1997年 | 90,448 | 309,264 | 399,712 |
| 1995年 | 1,264 | 35,876 | 37,140 | 1998年 | 86,904 | 320,484 | 407,388 |
| 1996年 | 1,395 | 33,175 | 34,570 | 1999年 | 85,945 | 316,926 | 402,871 |
| 1997年 | 1,958 | 36,446 | 38,404 | 2000年 | 85,164 | 317,801 | 402,965 |
| 1998年 | 1,621 | 35,500 | 37,121 | 2000年割合 | 21.1% | 78.9% | |
| 1999年 | 2,148 | 32,854 | 35,002 | | | | |
| 2000年 | 1,967 | 31,898 | 33,865 | | | | |
| 2000年割合 | 5.8% | 94.2% | | | | | |

| 合計 | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| 年 | 海路 | 空路 | 合計 |
| 1993年 | | | 543,335 |
| 1994年 | | | 549,019 |
| 1995年 | | | 554,162 |
| 1996年 | 136,723 | 415,067 | 551,790 |
| 1997年 | 135,507 | 440,714 | 576,221 |
| 1998年 | 132,002 | 443,866 | 575,868 |
| 1999年 | 131,995 | 435,149 | 567,144 |
| 2000年 | 130,022 | 424,823 | 554,845 |
| 2000年割合 | 23.4% | 76.6% | |

| 阪神 | | | |
|---------|-------|--------|--------|
| 年 | 海路 | 空路 | 入域観光客数 |
| 1996年 | 8,868 | 50,977 | 59,845 |
| 1997年 | 9,193 | 61,846 | 71,039 |
| 1998年 | 8,386 | 57,776 | 66,162 |
| 1999年 | 8,514 | 53,505 | 62,019 |
| 2000年 | 6,827 | 49,715 | 56,542 |
| 2000年割合 | 12.1% | 87.9% | |

イメージ形成上の課題:「海」のイメージ作りと人文資源の活用(芸能文化と郷土料理)
「海」+ の, 周辺の離島観光地でないイメージ作りの提唱を行った。第1章(1)で記したように, 3Sに付加されたその他アトラクションの提唱である。芸能文化と郷土料理で新しいイメージが作れるか。すでに幾度も言われてきたが, うまくいかない。

観光地作りの基本方向: 個人・体験型, 自然・文化型, 環境調和型の観光地作り。

ハワイ・沖縄に対するバリ・奄美という二極対比モデルを提示した。理想モデルとしてバリ島を目指している。あわせてグリーンツーリズム, エコツーリズムを提唱する。経済効果はあるか。インドネシア政府による組織的, 意図的な新たな伝統作り(例えば, ケチャを初めとする舞踊など)と, バリ島南部の湿地帯を埋め立てて高級ホテル地帯に変えたヌサドゥア地区に見られるような大規模観光開発が行われたバリとは単純な比較はできない。バリ型を目指すには, 自治体による長期的観光戦略の構築と公共投資が必要である。

イメージ・コンセプト: 「神秘, 原色, 躍動の島々」, 田中一村と島唄による情報発信を提唱する。意味不明の語彙の羅列といえる。

この調査に際して行われた消費者アンケートの結果では, 奄美で楽しみなものとして「温暖な気候」, 「伝統工芸品」, 「亜熱帯植物」, 「美しい海」があがっている。また, 旅行したい観光地のタイプとしては, 「温泉地型」, 「自然型」, 「歴史・文化型」が60%以上を占める。アンケート調査の結果が示すことは, 消費者の需要は自然と歴史・文化にある。奄美の自

然と歴史・文化をどのように観光資源化し、消費者にアピールするかにかかっているといえる。

3. 歴史的文化遺産を活用した観光開発の可能性：文化財資源学の視点から

第2章で記したように、消費者の奄美観光に求める需要は、奄美の自然と歴史・文化である。自然については今さら述べるまでもない。歴史・文化についてはその存在価値が認識されてこなかったくらいがある。歴史的な文化財を観光資源として活用し、あわせて歴史的な文化財の保護と地域住民の自分たちの歴史と文化に対する意識高揚をはかることは、将来の奄美にとって重要なことである。

海の道：島と島を結びつける歴史的な文化財の存在とその観光資源化

自然の陰に隠れて奄美の歴史的な文化財はあまり知られていないが、近年重要な遺跡が発見され、奄美の歴史的な文化遺産は注目を浴びている（鹿児島県教育委員会1995）。なかでも浅い海底から貿易陶磁器が大量に発見された倉木崎遺跡の中国陶磁器（12～13世紀）（浙江省龍泉窯系青磁、福建省同安窯系青磁、福建省系白磁、福建省泉州磁甗系陶器、江西省景德鎮系青白磁、福建省建窯天目など2300点）（宇検村教育委員会1999）から発されるイメージは、東シナ海を巡る中世大航海時代、セラミック・ロードの中継点の一つとしての奄美の姿を物語る。また、沖縄、奄美、種子島を結ぶ、紋様が彫刻された貝殻製装身具がある。笠利町サウチ遺跡の貝殻製装身具（笠利町教育委員会1978）が持つイメージは南島と本土を結ぶ弥生時代の貝の道、シェル・ロードの道の中にある奄美の姿である。これら考古学および歴史的な文化財の発掘とその観光資源化を計る。

ミュージアム・ネットワークの設立と活用

2001年に完成した県立アマミパークをコアとし、笠利町立歴史民俗資料館（考古学）、名瀬市立奄美博物館（考古学）、原野農芸博物館（民俗学）、瀬戸内町立郷土館（民俗学）を結ぶ博物館ネットワークを作る。上記の博物館は奄美大島の南北ルートに位置しており、島内観光の移動ルートとも一致させる可能性がある。島内にはその他にも小規模の博物館や、博物館類似の観光施設がすでにある（大島紬村、浜千鳥館、アイランズ・ステーション、シェルロード、野菜坊焼窯元など）。これらの小規模施設も含めてミュージアム・ネットワークを作ることにより、奄美全島に博物館網が張り巡らされる。あわせてエコミュージアム構想（大原1999、小松1999）の成立の可能性を探る。

自然・歴史・体験の複合型観光の開発をもとめて

従来、奄美ではエコツーリズムが観光の主役であった。そこに、もうひとつ考古ツーリズムを付加することにより、これまで来訪しなかった歴史ファン、考古ファンも呼び込める可能性がある。奄美大島では考古遺跡と博物館とを有機的に、しかも地理的バランスよく組み合わせることができる。遺跡があるところはいずれも美しい海浜やマングローブ原生林、サンゴ礁のあるところであり、考古ツーリズムと自然を楽しむ観光とがうまく組み合わせることができる。倉木崎海底遺跡を契機として、ダイビングと海底の陶磁器探し、沈没船探しを取り入れることにより、もっとおもしろい海中歴史ロマンを味わうことができる。与那国島海底遺跡のようなウソではなく、奄美の中世史の開拓につながる面白さである。

さらに、奄美特産の黒糖焼酎は醸造場がある龍郷町、名瀬市、瀬戸内町に全部で57銘柄もある。北部、中部、南部を歩くことにより、全57銘柄を味わい尽くすことも可能になる。歴史ファンを中心とした新たな観光対象者を開拓できるし、あわせて自然と酒をも愛する人々を加えることができる。鹿児島県離島振興課の統計では奄美を訪れる人々の60%以上は航空路による。したがって空港のある笠利町が観光の起点・終点になる。笠利町、名瀬市、瀬戸内町は宿泊施設が多く、また民宿からリゾートホテルまで種類に富み、選択の幅が広いので、これら3地域が宿泊地になる。この3地域に博物館があるのもつごうが

よい。現実には2泊、あるいは3泊の日程が必要となる。解決すべき問題は島内の交通である。

考古遺跡を初めとする歴史的遺産を観光資源化する観光開発は佐賀県吉野ヶ里遺跡や鹿児島県上原遺跡の例を出すまでもなく、世界中で文化遺産の保存と経済開発と関係の困難な問題を解決するひとつの方法として行われている。奄美においてもその可能性を考慮すべきであるし、可能であると考えられる。

文 献

- 奄美群島観光連盟・鹿児島県大島支庁編2000『奄美群島観光の動向 平成12年』鹿児島県大島支庁
- 宇検村教育委員会編1999『鹿児島県大島郡宇検村倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村教育委員会
- 大原一興1999『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会
- 鹿児島県教育委員会編1995『歴史の道調査報告書 第3集 海の道』鹿児島県教育委員会
- 鹿児島県商工労働部観光課編1995『奄美群島観光振興総合調査』鹿児島県商工労働部観光課
- 鹿児島県商工労働部観光課編1996『奄美群島観光アクションプラン』鹿児島県商工労働部観光課
- 鹿児島県商工労働部観光課編1997『奄美観光イメージアップ調査報告書』鹿児島県商工労働部観光課
- 笠利町教育委員会編1978『サウチ遺跡』笠利町教育委員会
- 笠利町教育委員会編1981『宇宿貝塚』笠利町教育委員会
- 笠利町立歴史民俗資料館編2000『笠利町立歴史民俗資料館館報』第18号 笠利町立歴史民俗資料館
- 国土庁編1999『第3次奄美群島振興開発計画』国土庁
- 小松光一編著1999『エコミュージアム - 21世紀の地域おこし - 』家の光協会
- ピアス、ダグラス(内藤嘉昭訳)2001『現代観光地理学』明石書店